

# 臨床心理士・公認心理師試験対策授業を参観して学んだこと

大学院教育学研究科長  
横浜国立大学名誉教授  
修士（教育学） 高橋勝

今回の授業では、前回（1/30）と全く同様に、論述問題には一切触れず、選択問題への対応策に限って、授業が行われた。

授業に先立って、中島総長先生は、ご自分の経験を学生たちにこう語った。

自分は、37歳から42歳までアメリカの大学院に学び、異国の地で博士号を取得するために、語っても語り尽くせぬほどの苦労を味わった。英語という外国語の壁、沢山の授業の準備と毎回出される山のような宿題レポート、指導教員や論文審査委員との人種の違いや思想的立場の違いから生じる軋轢など。甘えを一切許さない徹底した実力主義の国アメリカで、自分は死に物狂いで勉強したからこそ、博士号を取得できたのだ。生半可な気持ちでは、何ごとも達成できずに終わるだろう、と。さらに、次のように続けた。

日本では、高校を卒業して、どこの大学に入ったかで人間の価値が決まってしまうような風潮がある。東大や早稲田大などの一流大学に入れば人間も一流で、知名度の低い大学に入れば、人間も低い価値であるかのように見なされてしまう。しかし、本当にそうなのか？ 皆さんもよく考えてみてほしい！ 人間の価値は、18歳でどこの大学に入ったかで決まるのではなく、大学に入った後の4年間で、どれほど勉強したか、どれほど努力して、難関の国家試験や希望者が殺到する就職試験に合格したかで決まるのではないのか？ それが、ほんとうの人間の實力であり、価値ではないのか？と。

だから、今は決して一流とはいえない大学にいる皆さんでも、臨床心理士の認定試験に合格すれば、一流の實力と価値を社会に示すことができる。安定した生活ができる。皆さんはいま、その再チャレンジの跳躍台に立っているのだ。このチャンスを決して無駄にしないでほしい、と。

競争を抑止して、横並び的な教育をしがちな日本の教育風土で育った学生たちが、中島総長の言葉を、最初どのように聞いたのかはわからない。しかし、1990年代からグローバル化の荒波が日本にも押し寄せ、企業は生き残りをかけた国際市場競争を、文部科学省も、子ども・若者に「生きる力」、「生き抜く力」の育成を求める時代となった今、大事なものは「学校歴」ではなく「實力」なのだ、何度もチャレンジする気概なのだ、だから今は實力を磨くことに専念してほしい、という率直なメッセージは、学生の心に強く響いたに違いない。

大島先生の授業は、過去の問題文を読み上げ、正解を熟読し、3~4分かけて、それを暗記するという方法で進められた。どの分野であれ、学問には基礎となるキー概念があり、出題は、必ずその限られたキー概念の中から選ばれる。だから、余計なことには手を出さず、そのキー概念だけを、何度も何度も時間をかけて頭の中に浸透させることが大事なのだ、という中島総長先生の受験哲学が実践された。たしかに確認テストで、今回も全員が満点をとった。これで、安心してはいけない。帰りの電車のなかでも、自宅の居間にいても、トイレのなかでも、問題集を手放してはいけないという言葉が印象に残った。